道　――La Strada――

あんのーん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
道　――Ｌａ　Ｓｔｒａｄａ――

【Ｎコード】
Ｎ６８３６Ｚ

【作者名】
あんのーん

【あらすじ】
封印戦争から１０年。
復興を遂げ往時の賑わいを取り戻した往来を、それぞれに顔を隠したひと組の男女が行く。
ひとりはハイラルの女王、ゼルダ。もうひとりはその従者。
ふたりはやがて、神殿の前に立った――
「時のオカリナ」エンディングから１０年後のハイラルを舞台に、ゼルダともうひとりの従者との、ある日の午後の邂逅を描きます。

数年前に同人誌として頒布した掌編です。
主人公がオリジナルキャラという、二次作品としてはちと掟破りなシロモノですが、ご一読いただければ、リスペクトをお伝えできると信じています^^;

序

彼の国は炎の中に潰えてから七年の長きに渡り魍魎が跋扈するにまかせていたが、
ある時王家の正統なる後継者たる巫女姫がその姿を現し、
魔王を打ち倒し空を重く覆い尽くしていた暗雲を払ったという。
風の噂を聞きつけてわずかに生き残り敗残を恥じていた騎士達がはせ参じ、
やがて離散した人々もそれぞれに家族を伴い家財を携えて城下に戻った。
それから十年。わずかな年月で国はかつての輝きを取り戻し、
人々は姫を誉め称え、日々の平和を祝った。
一方、戦の記憶は遠ざかりつつあった……

#1

その日、非番であった近衛隊のその男は通りすがった城門の通用口に怪しい人影を認め、声をかけた。
「何者だ？　そこで何をしている？」
外套のフードを目深に被った人影が振り向く。男はそれが華奢な女性であることを見て取り、次の瞬間「あっ」と声を上げそうになった。
「見逃してはくれませんか……？」
女性の口元はかすかに笑みを浮かべているようだ。聞くより先に男は膝を折り、
「失礼いたしました……！　我が主とは気づきもせず――」
と、恐縮しきった様子で口ごもった。
「立ちなさい。人目につきます」
外套の女性、ハイラルのゼルダ女王は男を立たせると、悪戯っぽくいった。
「ではついてきなさい。主の顔を見忘れた罰に、護衛を命じます」

「失礼ながら、どこへ参られるのですか？」
男は女王の半歩ほど後ろを歩きながら、控えめに訊ねた。
一見すれば良家の子女とその護衛といったところか。それぞれが身につけた衣服の質を見ても、身分の違いは明らかだ。
女王はもとより、男も顔を隠していた。女王はちらりと男の表情を盗み見た。穏やかだったが、そこには何の感情も見えない。つまるところ、己れの心を抑制することに長けた、訓練された戦士のそ

れであった。
額から右頬にかけて覆った布の下から、微かにひきつれた肌が見える。だが女王は、それについては訊ねようとは思わなかった。彼は武人、戦の経験があれば傷も負ったことがあるだろうと思っただけだ。むろんハイラルに於いては国を再建して以来戦などなかったが、それ以前、ちりぢりになった家臣達がどのように生きてきたかを考えるのはたやすいことだった。
「神殿へ参ります」
女王は短く答えた。
「……」
神殿へか。ついこの間も参ったばかりだというのに。
男はほんの少し奇異に感じたが、すぐにその思いを打ち消した。
十年前、女王は神殿を復興の中心に据え、それを往時のままに再建したという。国が栄えるに連れ人々に忘れられ、神殿はかつての静けさを取り戻していたが、ひとり女王だけは、毎月初めての安息日には欠かさず参っていたのだ。
それだけ神殿を大切に思っているということだろう、と、男は納得した。
女王はハイラルの女神の声を聞くことが出来るという。そうであればなおさら、神殿は特別な場所に違いない。
自分は月毎の参拝しか知らなかったが、もしかしたら女王はこうして時々こっそりと城中を抜け出し、ひとりで神殿へ参っていたのかも知れない。
危ないことを……と、男は心の中でひとりごちた。
今日はたまたま俺が見つけたから良かったものの、ひとりで供も連れずに城下へ出かけられるなどとんでもないことだ、と思った。同時に、そうしたこともあったればこそ、女王の供をできる僥倖にも感謝したのだった。
ふたりはその短い会話以外に何も話さず、城下へ入り、やがて神殿の前に立った。

#2

神殿の奥、神剣の間よりさらに奥。ハイラルの女王、ゼルダは、一見簡素だが美しくしっかりした作りの寝台の側にいた。

目を閉じそこに横たわっているのは、穏やかな表情の少年だ。年の頃は十五、六といったところか。天窓から降り注ぐ柔らかな光が少年を包み、その頬は生き生きとさくら色に輝いて、まるで今にも目覚めそうに見えた。

ゼルダは微笑むと少年に語りかけた。

「こんにちは……。また、来てしまいました……」

もちろん少年は応えない。寝台の傍らに小さな椅子を寄せ、その顔を覗き込むようにすると、ゼルダは手を伸ばし、少年の髪を撫でた。何度こうして触れたかわからない……。

「私は間違っているのかも知れない……本当は、あなたが帰っていった時に、あなたの体も返すべきだったのかも知れない。

でも私には出来なかった……ひとりぼっちには耐えられない。本当は、私は今も弱く愚かな子供のままなのかも……」

#3

「あれ、隊長？　ここで何をしてるんですか？」

男は声をかけてきた若者を見やった。

女王が神殿に消えてからどのくらいの時間が経っただろう。「誰も通すな」といわれたが、もとより神殿を訪れる者などないだろうとタカを括っていたから、声をかけられたのには内心少しばかり驚いていた。

興味津々といった風情で覗き込もうとする若者を、男が制した。

「なんですか……あやしいなあ」
「おまえこそこんな所へ何の用だ。勤めはどうした」
と、矛先を変える。
「宿直(とのい)明けです。ここに来たのはたまたまですよ」
若者はそう答えたが、ほんの少しの間のあと、またいった。
「神殿の裏手に今、綺麗な花がちょうど盛りでしてね。その……手みやげにしようかと」
「女か。いいな。若いというのは……」
「よして下さい。隊長だってまだ若いでしょ」
男は小さく肩をすくめて笑った。
若者は男より一回りも年下だろうか。数年前に城下の剣技会で優勝し、民兵から近衛隊に推された男だった。先の戦で一度滅ぼされ、文武共に秀でた人材が圧倒的に少ないこの国では、出自がどうであろうと本人の資質が優れていれば出仕も叶えるというのが、女王のやり方であった。
先の若者のどこかに他国の風情を残した風貌も、彼が生粋のハイリア人ではないことを物語っている。
城内には口さがのない者もいたが、男は利発で目端が利くこの若者を目にかけていた
「この神殿……」
と、若者は話を続けた。
「ご存じですか？　女王がこの神殿を再建されたとき、秘かに数多のドワーフを雇ったそうですよ」
「それが何か？」
男は気のない声で応えた。実際特に興味をそそる話題ではなかった。
「神殿の奥には、贅をこらした隠し小部屋があると……小さな寝台をしつらえ、さながら斎室のようで」
「そんな話は聞いたことがないな」
と、男は今度は終わりまで聞かずにいった。

「また、そうであっても、我らには関係のない話だ。どのみち神殿の奥の間へ入れるのは王族だけだからな」
「確かな話ですよ。その場で働いたというドワーフから直接聞いたんです。口止めされていたらしいがあの親爺、酔っぱらってましてね……」
「貴様」
ついにはっきりと怒りを含んだ声が若者を制した。
「口止めされていたという話をなぜぺらぺら話す？　他の者にも話したのか？」
「誰にも話してやしません。まだ子供の頃、ハイラルに来る前に、どこぞの宿屋でか耳にしたんです。今たまたま思い出したんですよ」
悪びれる様子もなく、いなすようなことさらに明るい声だった。
「……」
若者はちらっと門扉を伺うように見た。
「誰かいるんでしょう？　この中に……いや、答えてくださらずともけっこうです」
と、口を開きかけた男をやんわりと制し、若者は続けた。
「俺はただ、ずっと疑問だったんですよ。女王は神の御業（みわざ）を以て魔王を倒し、この国を復興したという――だけどそんな話、本当にあるんですかね？　魔法使いでもあるまいし……。
誰か、女王を助けた騎士でもいたと思うのが妥当でしょう？　でも誰も、そんな男の話など聞いたことがない――」
「それは、その男は死んだんだろう……魔王との戦いで」
そういいながら、男は若者のいわんとするところに思い当たった。
男の様子に、まんざらでもない風で若者も話題を切り上げた。
「先の話……。今、ここで会ったのが隊長だから話したんですよ。これからも、他の誰にも話しやません」
「そうしろ。今後同じ話が私の耳に入ってきたら、おまえの首を刎ねてやる」
厳しい声でそう応えてから、男はふとした様子で訊ねた。

「おまえは先の戦を覚えているか？」
「いえ……」
と、若者は特に感慨もなさげに答えた。
「俺は外地の生まれですし。父親はハイラルの人間ですが、戦のずいぶん前にこの国を出てたんですよ。なので戦で滅んだと聞いたときは、ずいぶんと落ち込んだようです。人づてにハイラルが再建されたと聞き、俺と母を連れてこの国に戻ったんですよ」
ひと息つくと、若者はつけ足した。
「まあ町人の倅が兵卒とはいえ王家に仕えられるなんて、普通には考えられないことですからね。近衛隊に入れたときの、親父の喜びようといったらなかったですよ」
男はかすかに微笑んだ。
「そうか。それは良かったな」
「図らずも親孝行が出来ました……だから恩には報いるつもりです。尤も」
若者が悪戯っぽく笑っていった。
「今後何事もなく俺達の出番もなく、平和が続くのが一番ですけどね」
「全くだ」
男も笑った。
「では」と軽く頭を下げると、軽い足取りで若者はその場を去って行った。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6836z/

道　――La Strada――

2011年12月23日00時54分発行